

生徒が主体となる授業の創造
～「協働力」を基盤とした学力向上の取組～

鳥取市立河原中学校

スーパーバイザー：上越教育大学教職大学院 赤坂真二 教授

1 研究目的

本研究の目的は、生徒が主体となる授業づくりのために、学びの主体である生徒集団の「協働力」を基盤とした授業開発と教育活動に取り組み、その方法を教師の協同的な取組によって明らかにすることである。

2 問題の所在

本校は全校生徒150名の小規模な中学校である。鳥取市南部の山間部に位置しており、周辺は自然豊かな環境である。生徒は落ち着いて学習に取り組み、この数年間の学力状況はおおむね全国平均を上回る水準を保っている。

昨年度の研究では、さらなる学力向上を目指して、アクティブラーニング授業の実践に取り組んだ。その結果、それぞれの教師がこれまで積み上げてきた手法に、学び合うアクティブラーニング授業の視点を加味することで研究を充実させることができ、生徒の学力向上にも一定の成果を得ることができた。

一方で、学年によって学習に対する意欲に差が見られ始めたことや、少数ではあるが学習や学校生活の楽しさを十分に味わえていない生徒が現れ始めていることが課題として浮かび上がってきた。

そこで研究推進上の課題を次の3点に集約し、鳥取県教育センター平成29年度スーパーバイザーによる学校教育支援事業の助成研究に取り組むこととした。

第1に、学力向上を達成するためには生徒の学習意欲の維持向上という側面は無視できないものであり、そのために教師の小手先の授業改善だけではなく、学びに向かう姿勢をはぐくむために協働できる学習集団づくりが不可欠である。

第2に、学校全体として協働できる学習集団づくりをめざす空気をつくることである。教師集団が全員同じものさしで指導にあたり、いわゆるヒドゥンカリキュラムを整えることである。

第3に、現在学力向上学習集団づくりのためにやっていることの意義を再検証しその意義を共有した上で実践することである。本校にはこれまで継続して取り組んできた様々な取組（基礎力大会、自学ノート、黙想、2分前着席、朝読書など）がある。これらの意義はどこにあるのか、本研究の目的に照らして再検証することが必要である。

3 研究内容与方法

(1) 内容

本研究では、研究副題を『協働力』を基盤とした学力向上の取組』とした。前述したように、学力向上のためには授業改善だけを方法とするのではなく、あらゆる教育活動を通して学力向上へつながる学習集団づくりを目指すことが肝要である。そのために教師と生徒がともに意識できる合い言葉として「協働力」に着眼した。

「協働力」は、特別新しい概念ではない。赤坂（2017）は、「協働力は、伝統的に学校教育では大切にされてきた能力」と説明する。そこで研究推進において次のように共通理解して実践を進めることにした。

「協働力」…一人では解決できない課題を、良好な関係を構築しながら、解決する

それではなぜ「協働力」に着眼したのか。端的には、質の高い学びはまとまりのある学習集団によって達成されると考えるからである。また、まとまりのある学習集団が形成されることで、学習からこぼれ落ちる生徒を防ぐことができる。さらに、そのような前向きな「空気が学校全体を活性化させると考えるからである。

(2) 方法

① 教育活動全体を通しての「協働力」の育成

「協働力」を育成するためには、学級における班活動等の充実はもちろん、教育活動のあらゆる機会をとらえて指導にあたることを大切にしたい。

例えば、年度当初に学習部から示される「学習のきまり」では、今年度「全員で」を合い言葉に加えた。全員で、授業の挨拶や黙想に正しい姿勢で臨むことや、自主学習の提出を全員で目指すことの意識を再確認した。

これを受けて、委員会活動では「挨拶・黙想コンテスト」や「自学コンテスト」などの企画を提案し、生徒が自ら「全員で」物事をやり遂げるための取組を行った。

また、運動会、文化祭等の学校行事、球技大会等の生徒会行事でも、集団の力を高めることを意識した取組を大切にしたい。

② 「協働力」を基盤とした授業づくりの研究

各教科の授業において、あらゆる教育活動を通して育まれた「協働力」を基盤とした授業づくりを研究した。

研究にあたっては、教科の枠を越えて教師のチームを3つ編成し、チームごとに研究を深める方法を採用した。一人一人の教師が授業を公開し、チームでの事前・事後の協議を通して「協働力」を基盤とした授業づくりの方法を考えた。

また、全体研究会を年に3回設け、よりよい授業づくりの方法を教師集団全体でも研修する機会を設けた。このうち2回（3学年音楽科、1学年社会科）は、スーパーバイザーによ

る指導の場を設けた。

③ スーパーバイザーによる研修会の実施

スーパーバイザーを招聘した講演会を年2回実施し、学校教育における「協働力」の大切さと、実際の授業方法について研修を深めた。

教師集団の「協働力」に対するイメージを共有し、学校として「協働力」を基盤とした授業づくりの方向性をゆるやかに揃えることを目的とした。



4 スーパーバイザーによる指導助言

○ これからの社会に求められる協働的問題解決力

これまでの教育は、教師が思い描いた授業の範囲内での知識・技能、活用力を目標とした正解到達型の授業だった。これからは授業目標に到達すると同時に、さらなる疑問や目標を創出する目標創出型の授業に転換する必要がある。

つまり、誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく、一人一人が考えや知恵を持ち寄り、主体的に問題解決する協働的問題解決力が重要である。これはアクティブラーニング型授業そのものといえる。

○ 「協働力」とはカタチではなく学習者像である

協働というとペア学習、グループ学習などの学習形態が想起される。しかし、大切なのはカタチではなく、他者の成長を願い、他者や集団に貢献することを是とする学習者像として捉えることである。

そのためには、教師が本気で生徒同士が助け合うことを求めていくことが必要である。学習活動のゴールイメージとプロセスイメージを明確にもち、生徒同士の支援ができる関係をつくり、学習への参加度を上げる授業をつくる。

○ フリーライダーを生まない土壌とシステムをもつこと

一斉講義型の授業は、他者が何かを与えてくれるのを待つフリーライダーがいても成り立つが、アクティブラーニング型授業では学習者の参加度が下がると学習効果が下がる。

大切なのは、個人作業の時間の確保と一人一人の平等な発話量の確保である。学び方のルールをつくり、それを明確に示してやる必要がある。また、行動表記型のねらい（～ができる）を提示することで、学習への参加度を上げることができる。

○ 意味ある協働にするために

授業において、課題設定、協働、リフレクションの学習過程を仕組み、思考をメタ認知さ

せることが重要である。リフレクションの言葉として、「どうしてめあてを達成できたのか」など、集団コミュニティをつくりながら学んでいることを意識させる。

5 成果と課題

(1) 成果

① 生徒主体の教育活動の活性化と学習へ向かう空気の醸成

「協働力」の高まりによって、生徒の主体的な参画による教育活動の活性化が見られる。

生徒会執行部による球技大会の発案が行われ、これにより、生徒自身が集団としてのまとまりを確認し、協働することの価値を共有することができた。

また、協働体験の積み重ねから、他者貢献の意識が芽生えたことも挙げられる。生徒達が地域施設の清掃活動を企画し、全校で地区の体育館や駐車場の清掃活動を行った。つまり、他者の喜びを自分の喜びとする生徒集団が育ってきた。

このように、「協働力」により、生徒自らが学校生活をつくっていかこうとする動きが活発に見られはじめ、同時に主体的に学習へ取り組む姿にも変化が見られてきた。

「全員で」という合い言葉により、自学ノートの提出や各教科の課題への取組をよりよいものにするために、一人の力ではなく集団全員の力でやっけていこうとする前向きな空気が生徒自身の手で醸成されはじめている。

② 「協働力」を生かす授業

スーパーバイザーからの指導をもとに授業実践と授業研究を重ねた。特に顕著な成果として次の3点を挙げることができる。

第1に、生徒の協働を学習に仕組むことで、学びの質を上げようとする教師の意識が育まれたことである。協働を学習形態ではなく学習者像として捉え直すことで、授業者が協働させる目的と方法を明確にもち、学びの質を高めようとする授業が試みられた。

第2に、授業における不易を大切にしようとする共通感覚が共有されたことである。例えば、授業のねらいを行動表記型（～ができる）として提示すること、学習者を対象に浸り込ませていくこと、個人思考→協働→個人思考という学習パターンで学ぶ身体をつくることなどである。

第3に、協働して学ぶことを楽しむ生徒の姿が様々な教科で見られることである。協働することそれ自体を楽しむだけでなく、協働して新たな知をつくることを楽しみに学ぶ生徒の姿が見られてきた。このことは「協働力」に着眼した教師の授業づくりの取組が一定の効果をもたらしていると考えられる。

③ 職員の協働性の高まり

グループによる授業研究を取り入れたことで、教科の垣根を越えて授業づくりに関するやりとりが行われるようになった。また、授業改善だけでなく教育活動の様々な場面をとら

えて生徒の「協働力」を高める働きかけを行うことが日常化され、すべての教員がめざす生徒像を共有できるようになった。

(2) 課題

○「課題」「協働」「リフレクション」のサイクルの確立

今年度の取組では、「協働力」という概念を共有することに力点があり、どの授業の中でも共通に行うシステムづくりまで研究が及ばなかった。

課題提示、協働、リフレクションというサイクルを確立し、生徒が学びをメタ認知できるシステムをつくることが課題である。

○客観的なデータによる学力向上の考察

学力テスト等の量的データに基づく学力向上の考察ができておらず、効果の検証が質的なものにとどまっている。学力テスト等のデータに基づき、客観的に研究の成果を考察することが課題である。